

東京高等師範学校	五〇	一〇	三	九	一一	一九	一二
広島	八	一	一	二	一	一	五
女子	二六	七	二	八	一三	一八	八
札幌農学校	一四	一	一	一八	一	一	八
盛岡高等農林学校	三	一	一	三	一	一	四
東京高等商業学校	三〇	一	一	一四	一	一	一
神戸	三	一	一	二	一	一	三
第一高等学校	三七	一	一	九	一	一	八
第二	二四	一	一	五	一	一	六
第三	二四	一	一	七	一	一	七
第四	二四	一	一	一〇	一	一	六
第五	三三	一	一	一二	一	一	八
第六	二二	一	一	五	一	一	六
第七高等学校造士館	一三	一	一	五	一	一	五
山口高等学校	二〇	一	一	三	一	一	六
千葉医学専門学校	一三	一	一	七	一	一	五
仙台	一一	一	一	六	一	一	五
岡山	一一	一	一	七	一	一	五
金沢	一二	一	一	五	一	一	五
長崎	一一	一	一	七	一	一	五
東京高等工業学校	二四	一	一	三九	一	一	八

大阪	一五	一	一	二五	一	六
京都高等工芸学校	六	一	一	六	一	五
東京外国語学校	一九	一	一	一	一	五
東京美術学校	二三	一	一	二四	一	五
東京音楽学校	九	一	一	一	一	四
東京盲啞学校	一	二	一	一	二	四

(明治三十五年三月九日『時事新報』による)

『東京美術学校校友会月報』記事抜粋

東京美術学校記事(二一)号。M・三五・六月二十一日

○學科に關する事項 重なるもの左の如し

日本畫科 從來寫生の爲に別に一教室を設けありしが(三十四年九月開始)今學年より各

學年級の教室に於て寫生をなすことゝなれり

教員志望者の木炭畫練習 日本畫科圖案科の同志望者には(三十五年)本年より

第四年級に於て木炭畫を練習せしめ居れり

彫刻科の解剖學 美術解剖講義の外彫刻科教室に於て生人及製作物

に就き(三十四年九月開始)本學年より解剖學を講義す 久米教授の擔任なり

密器製作講義 圖案科課程物品製作大意の一部として(三十五年二月より)

鹽田力藏〔日本美術院正員。同院編集部主任〕氏の擔任にて開始

せられ望みの者には隨意に聽講せしめらる

伊語科 本年三月五日より科外に於て此科を新設し望みのものに學

修せしめらる 擔任講師は東京外國語學校教授伊藤平藏氏及同校

講師吉田秀男氏なり

英語科 本年五月よりは亦科外に於て新設せられ望みの者に學修せ

しむ 本校教授岩村透氏之を擔任す

石彫及牙角教室 本年五月より彫刻科中規則中の此二教室を開かる

漆器製作大意 本年五月より囑託教員石井吉次郎氏の擔任にて漆工

科實習時間中に於て之を課することゝなれり

○職員に關する事項 本校一覽に掲載せる以後〔三十四年〕より録すれば左の如し

十一月廿六日 高等師範學校助教授白濱徵氏本校教授に任し高等

官八等に敘せらる

一月四日 足立厚實氏は躰操副科柔道指南を松石涉氏は同劍術指

南を囑託せらる

同月廿一日 本多利實氏躰操副科弓術指南を囑託せられたり

同月廿七日 學校長正木直彥氏は普通教育圖書取調委員長を、教

授黒田清輝、白濱徵、囑託上原六四郎の三氏は同取調委員を命

ぜらる

二月四日 岡田三郎助氏西洋畫授業囑託せらる

同月十九日 近藤延太郎氏辻村と改姓の旨届け出でらる

同月廿二日 鹽田力藏氏圖按科物品製作大意中の審器製作講義を

本學年中囑託せらる

三月十八日 雇助教津田信夫氏本校助教に任ぜられたり

同月廿日 教授久米桂一郎氏高等官五等に陞敘せらる

四月五日 囑託教員岩村透氏東京高等工業學校助教授島田佳矣氏

各教授となる

同月廿五日 從六位勲五等工學士森省吉氏〔善〕へ應用化學實驗授業を

囑託せらる。

同月三十日 漆工科卒業生石井吉次郎氏に漆工科授業を囑託せら

る

同月廿九日 教授高村光雲氏は向ふ三十日の見込を以て古社寺寶

物取調の爲山口外二縣へ内務省の命にて出張す

〔補遺〕一月廿一日 教授黒田清輝ハ西洋画科主任ヲ教授石川光

明ハ牙彫教室担任ヲ命セラル〔職員辭令メモ〕

○本校設立紀念日 創立以來別に催しもなかりしが昨年十月四日の

紀念日には在京卒業生に招待狀を發して集合を促し午前九時職員生

徒一同及卒業生八拾有餘人本會俱樂部に集合し校長の祝辭、卒業生

及生徒總代の祝辭あり終りて茶菓を饗せられ懇話快談に時刻の移る

を覺えず一同歡を盡し午後に至りて退散せり

○成績品の 天覽 二月二十日東園侍從本校に臨まれ各科教室を巡

覽せられ 天覽に供する爲生徒成績品を差出すべき旨御沙汰あり

依りて成績品三十七點を差出したるに左の三點御買上の榮を蒙りた

り 日本畫 春野雉子圖 筆者 森田豐次郎

同 初秋山水 同 前波覺次郎

同 蒔繪 秋草手筥 作者 前川 佐一

○直轄諸學校定員の改正 三月廿七日勅令第九十九號を以て發布せ

らる 本校に關する改正の分を抜抄對照すれば左に記す如し

教授 舊定員十八人 新定員二十三人

助教 舊定員廿三人 新定員二十四人

○學資補給の創設 從來本校には學資補給の途なかりしが本年四月

一日文部省令第九號を以て實業學校教員養成規程を改正し本校にも本令によりて學資補給者を置くの途を開かれ本年度に在りては差向き五名を撰拔し一ヶ月金五圓づゝを給することとなり五月五日左の五名を補給者と定められたり

澤田誠一郎(圖案一年) 十二町貞吉(圖案一年) 竹内友吉(彫刻一年) 常木新藏(漆工一年) 堀井政吉(漆工二年)

○假入學生 本校規則第九條但書により昨年より中學校卒業生は無試験にて四月中旬假入學を許して實技のみを學修せしめ六月の終りに試験を施し合格したる者は其年九月より豫備課「正式名称は「予備の課程」へ本入學を許すこととなし二十餘名の入學者ありしが其成績甚だ良好なりしかば本年は猶其入學者を多からしめんとて各中學校及府縣へ照會したるに五拾餘名(内師範學校卒業生三名)の入學者ありて目下毛筆畫木炭畫及塑造を學習せしめ居れり

○本校卒業式 例年七月十一日なりしが本年は繰上げ七月二日盛んに其式を執行すといふ

○本校成績品展覽會 卒業式に引續き七月十一日迄校内に於て開き顯官名士を招待し並に生徒の父兄保證人及一般世人に縱覽せしむる由にて目下準備に忙し

○本校生徒募集 例に依り豫備課程「予備の課程」生徒を募集し七月四日より其競争試験を行ふの豫定なり 又撰科生は正科生欠員の場合優等者に限り入學を許す由にて入學試験は同月十四日より始むる事に決し入學志願者には何れも六月廿八日迄に願出<sup>書</sup>を差出ださしむといふ

○本校生徒の受賞 日本美術協會に開きたる美術研究大會に於て本

校圖案科生徒の賞を受けたる者左の如し

二等賞 本科第一年 澤田誠一郎

三等賞 同 第三年 小場 恆吉

三等賞 同 第一年 十二町貞吉

一等褒狀 豫備之課程 人見 鐵三

一等褒狀 同 磯野富之助

二等褒狀 同 小島喜三郎

二等褒狀 撰科第三年 森田 洪

三等褒狀 豫備之課程 森垣 榮

○懸賞圖案 昨明治三十四年十月以來本校にて募集したる懸賞圖案の賞選に上りたる者の姓名を録すれば左の如くなりといふ

應用彫刻及器具(甲部)

一等賞 小壁圖案 <sup>〔予備の課程〕</sup> 豫備課 <sup>〔圖案志望〕</sup> 松川第八郎

二等賞 珈琲皿圖案 同 <sup>〔日本画志望〕</sup> 大村 友雄

平面模様(乙部)

賞金等 友仙染圖案 圖案科一年 澤田誠一郎

分贈與 窓掛圖案 同 科三年 森田 洪

高等師範學校校友會賞牌圖按

賞金等 彫金撰科三年 鈴木 義彦

分贈與 <sup>〔予備の課程〕</sup> 豫備課(彫金志望) 木村第一郎

第一高等學校依頼胸像石臺圖按

一等賞 <sup>〔予備の課程〕</sup> 豫備課程 <sup>〔圖案志望〕</sup> 森垣 榮

二等賞 圖案科一年 澤田誠一郎

三等賞 同 同 十二町貞吉  
四等賞 同 同 澤田誠一郎

千葉縣教育獎勵賞牌圖按

一等賞 西洋畫撰科一年 野田 昇平

二等賞 圖案科一年 澤田誠一郎

同 日本畫科一年 小沼 直

第五回内國勸業博覽會賞牌獎狀圖按

賞牌の部

二等賞 圖案科三年 小場 恆吉

同 同 一年 澤田誠一郎

同 同 同 十二町貞吉

褒狀の部

一等賞 圖案科一年 十二町貞吉

二等賞 同 同 人

二等賞 西洋畫撰科二年 坪田虎太郎

○吉田清二郎氏の病歿 明治二十五年六月本校雇となり廿六年八月雇を解かれ去三十三年十二月及び本校に入り調漆授業囑託教員たりし同氏は本年二月頃より肺患に罹り三月廿七日遂に没す 惜むべし 氏は天保八年二月江戸花川戸に生る 行年六十有六

○依囑製作 左の四點は重なるものなり

永山氏紀念銅標 劍狀にして高丈餘の銅標なり 去年八月竣成す

北海道炭鑛鐵道會社の依頼に係り永山武四郎氏の北海道拓殖の事及同會社創立に關して盡力せられたるを徳として作りしものなり

といふ 劍の銘に曰く

「破關鏃直貫千里路。活人劍長掃北海雲」

濱松町戰捷紀念銅標 明治二十七八年戰勝紀念の爲に建つるもの

圓柱の上に金鵝を据えたり 本年五月竣成す

宮城縣昭忠標 是も亦戰捷紀念の爲に仙臺市に建つるものにして臺

座は既に仙臺へ回送せしも上部の金鵝は鑄造中に屬し其羽亘り二

十二尺なりといふ

佐久間貞一氏胸像 日本圖書株式會社の依頼に係り原型は黒岩淡哉

氏擔任製作中

滋賀縣社寺寶物修繕 昨年十一月を以て一先歸京したる林美雲氏及

松原象雲、野口藤三郎の兩氏は復び同縣下社寺の依頼寶物中殘し

來りたる分の修繕に従事する爲四月十三日出發せり 竣成は凡五

ヶ月程の見込なり

教室雜俎〔同〕

○日本畫科 何かに別段大した事も有ませんさ、只溫和く描てる計りで之と云ふ程の事も無い位、それは皆様教室へ御出に成れば分る事で、机の並べ方などもシメントリイに出來てるのは他には有ません、從て何もかも整然として居るでせう。何しろ御隣からは領分を掠められるし、奥の二年には通路にされて、豫備なればこそ黙つて居ますが、内々は税金でも取つてやりたい位だ。又御隣の例の馬鹿騷と、奥の何とか云ふ、亞米利加の百姓でも穿きさうな長靴先生には、靜かな臨畫の時には殆んど閉口する、よく下の彫刻教室で、地震と思つて飛び出さないのが不思議と思ふ位です。（豫備生〔西村青焔、水上泰生らのクラス〕）



僕のクラス程、美術家的要素を個人的に表現して居る組は少い。聖人も居れば君子も居る、軍人も居れば學者も居る、少し無情の人も居ればミウジックの上手も居る、然し之は只表向の觀察だけで、あの君子然とすました毛利「教定」君の謠と來ては黑人もはだしと云ふ可しだ、又無邪氣なのは風貌清楚とでも評すべき小沼「直」君のバイオリンは、さすが音楽學校へ通つて居るだけで有て、一抑一揚、實に其巧なのに驚かざるを得んだ（年成ふみ「二年のクラス」）去る二月の新按は、梅と云ふ畫題で、十四人の生徒中八九人成績を出したが、其内七人迄は皆美人を中心として畫たのであつた。是は決して墮落した世間の風潮に感染した理由では無い、各自が高尙なる考を有て居るので、他日愛の神、平和の神、繁榮の神などの、理想の神を畫く可き手腕を、今日練へて置く事にしやうと、各自が不言不語に約束したのであるだから、今度は凡てが出来がよい様であつた（二年渡邊「忠三郎」〔松岡映丘、川面義雄らのクラス〕）僕（三年生）の級で一番畫の分つて居るのは笹嶋「秀弥」君で、想も非常に大きい。それで畫に對しては積極的に研究して居て、まだ自分は、畫を如何に描き出す可きかと云ふ事は、餘り務めない。だから新按は想のみ勝て、技術はまづい、又此頃は下村「觀山」先生の目の付け所を研究して、もう先生を理想的人物と爲して居る様だ。久野「亀之助」君も日本畫が現はして居る、美の絶頂へ、自分の基礎を定めて居る。だから一方から見れば非常にいゝが、それが又氏の短所で、君の畫は想は足りて居るが、それを現はすだけの、道具立が不足だ。誰れも日本畫のよい處が分ると、今の畫はせせつこましい感がする、然し、或る方面だけは、確かに發達して居る。だか

ら、そんな所を取て、今少し普遍的に行つたら善いと思ふ。

技術の品のよいのは、長谷川「綠邦」君と井芹「市次・蘇泉」君だ。長谷川君のは、中々貴い所があるが、それは眞面目にやる至誠が現はれて居るからだらう。又描法も中々研究して居て、いつも一所に居る南畫描の先生に、洋臭の浮世畫師だと、言はれると云て、こぼして居る様だ。又中嶋「重丸」君の畫を見て、いつも氣持のいいのは、少しも苦と云ふ事の無いのだ。描法などはちつとも構はず、自分の思ふ通りがよく現はれて居る。だから花を畫ても鳥を寫しても、自から其中に延び／＼して、一種まねの出來ぬ所が有る。

伊藤「繁延・龍崖」君と西方「俊造・春叢」君は、上手は級中一番有るが、只技術だけで苦心した蹟が少しも見えない。丁度古今と萬葉とを比較すると、萬葉の深遠とか壯大とか云ふ事が、一方に無い様な者で、伊藤君なども、只目下の成功と云ふ事に重きを置かんで、繪事は終生の事業であると云ふ、大覺悟の基に想を常に練て行つたら、實に立派の者が出來様と思ふ。葛「揆一郎・江月」君は寫生は一番得意で、又ローマンチックを自分の主義と爲て居る様だ、誰れでもローマンチックを唱へると、日本畫の描法變化と云ふ事に氣が付く、實際從來の描き方では、畫家の個性を現はすには適當かも知れぬが、自分の燃える様な、同情を寫すには、餘り適當しては居ない、それで又描法を改良して、日本畫で最もしにくい、顔に感情を現はす事や、被色（膚力）の變化をやつた所で、油畫ではたやすく出来ると思ふと、今少し何とか爲てほしい、又顔料の美、線の美も使つてやる方が、或は愉快の成功を得るかも知れぬ（茂「永倉江村」）○木炭畫教室 既に人の知らるゝ如く木炭畫教室は、パンと離る可

からざる關係ありて、パンが無ければ木炭畫は描けぬと云ふ仕儀。

無論夫れは木炭を消す爲で、先ず半斤を六人位で分配して使ふ、と云と皆消す一方に聞えるが事實は大違ひで、其大部は人間の腹の中へ投げ込むで仕まう。それ故誰も少少く切た中でも、一番大く且美味さうなのを、撰り取りにする。中にも拙者などは、自分でパンを分ける時には、特に一ツ大きく切て置いて、夫れを御自分の喰ひ料とする。最も其外に更に一ツ消料のをば取ると云ふ次第。だが是も始めの内、追々誰も手を出す者も無くなつて来る(山下「新太郎」)

○油繪教室 此頃或るモデルの母とか死去致候に就ては、以來左様の場合には、有志應分の義捐金を集め、資香料として贈る事に致しては如何に候やなど、申され居り候ものなど有之候。

研究科生に於て、數度行はれたる競技にて、優等と認められたる者には、在本邦外國畫の模寫を命ぜられ候が、目下は左の四名にて候、

中澤弘光 (ウイツマンの月夜の景)

湯淺一郎 (ポッチチエリーの壁畫)

八條彌吉 (コランの半身婦人の圖)

庄野宗之助 (クロードロランの風景畫)

數度白馬會の懸賞に應じ、賞を得たるは、窓掛にては岡野〔栄〕、森岡〔柳藏〕、橋本〔邦助〕、中村〔勝〕〔治郎〕壁紙にては宇和川〔通諭〕、森岡〔柳藏〕の諸君 其他は次號に可申述候

○彫刻。塑造科 教室の全體を通じて、塑造用の心棒が不足するので、非常に都合が悪い 之が一。亦た油土の貸與が少いので、製作上不便を感じるのが二。一體に教室の狭いのが三。一年に五六回宛

教室の模様換するのが四。撰び粕のモデル計來るのが五。木彫部は學校で教材の方法を講じて呉れぬが六。先づざつと比んな者で、不平を鳴らすのは、よく無いが、少しは學校でも、顧みて貰い度いものだ。(不平生)

新に出來た、象牙石材の二科は、人は少いが熱心にやつてるが、只木彫は卒業して、需用の少いので勢の無い手付で、コン／＼削て居る、其變り代寫生課塑造の方は餘程熱心の様である。

○彫金科 他の教室では大低低無くなつたが、此建物だけは疊畳有る。だから、靴を脱いたり履履たりの世話もあり。又制服のズボンの膝が凸出して、甚體裁が悪い、早く机にして、椅子を用ゆる様にして貰ひたいので有る。

又先達教授が彫金圖案と、片切彫刻とを懸賞で募集したが、當選者が九名あつた、課題は新年梅と云ふので、一等は梅に鶯で鈴木義彦 梅と松飾加納秋三、二等は梅に奴胤小林友吉 瓶梅に短冊中里則光、梅に犬平田卯之助、三等は太刀冠で玉川健太郎の諸氏である。

○圖按科、鍛金科、鑄金科、漆工科に雜俎なし。

東京美術學校近事〔一一二。M・三五・七・一五〕

○前號掲載後に於ける、職員の動靜左の如し

六月二日。休職本校教授香川勝廣氏、休職満期となれり。

同月十日。教授久米桂一郎氏、從六位に敘せられたり。

同日。教授山名義義氏、病氣危篤に依り、特旨を以て、位二級を

進め、從五位に敘せられ、又勲六等に敘し、瑞寶章を授けらる。

同月十二日。教授白濱徵氏、教員檢定委員會臨時委員仰付けらる。

○山名貫義氏の卒去 本校教授帝室技藝員たる同氏は、六月十一日、腦溢血症の爲に卒去せらる。是より先、同月二日、同氏は其自邸に於て、俄然此病に罹り、爾後専ら療養中なりしが、薬石の効なく、遂に此不幸を見るに至る。誠に痛惜に堪へざるなり。

○依囑製作 目下製作に着手中なるは、仙臺市青葉城天主臺跡に建設すべき昭忠標なり、こは前號にも記載せし如く、上部金瑠を据付くべき臺座は、嚮に出來し、其後金瑠の鑄成を取急ぎつゝありしが、五月十二日、本校鑄金工場に於て、之を鑄造し了りたるを以て、現今は其仕上げに從事中なり。

○彫刻科木彫教室 從來疊敷にて、教授し居りしが、教授上甚不便なるより、來學年よりは之を改めて、机腰掛けにて、教授する事となさむとて、目下其の可否に就きて、協議中のよし。

○本校卒業式 前號記載の如く、本年は文部大臣も臨席せられ、演説もある筈なるを以て、文部省其他、各省の高等官、並に府下の直轄學校長、公私立中學校長 保證人等へ、正木校長よりそれ／＼招待状を發せられたる由に聞く。

○生徒成績品展覽會 愈七月二日より、同月十一日まで、開設するを以て、目下委員を設けて、其準備に忙はしく見受けらる。聞く所に依れば、出品目錄（日本文及歐文）を製し、又本校の教授要旨を作り、之を印刷に付して、卒業式及二月三日の兩日、特に招待したる、顯官名士に領布し、四日以後は、生徒の父兄保證人其他の縦覽

を許す事に定まりたりといふ。

○青年漆工會に於て本校生徒の受賞 先般同會にて、本年の秋季大會へ、出品するの準備として、懸賞にて、卷蓂莒圖案を募集したるが、其當撰者中、本校漆工科一年生佐野常榮氏は、紫陽花模様にて一等賞を、梅に水模様にて二等賞を得たりといふ。

○博覽會建築裝飾圖案 第五回内國勸業博覽會美術館の破風の裝飾、及水族館の噴水器圖案は、兼て農商務省より、本校に依託せられ、圖案科にて考案中なりしが、此程出來したるを以て、同省へ回送したりといふ。

○博覽會出品準備 本校にては、來年開設の第五回博覽會教育館内へ、一室を作りて、各科の作品を蒐集出陳せんとて、其坪數、間取、裝飾等に就きて協定し、其設計を本省へ提出せしといふ。

○本校生徒の諸學校參觀 教授白濱徵氏、本校生徒中教員志望者を引率して、六月六日、高等師範學校、女子高等師範學校、學習院、華族女學院、陸軍中央幼年學校等の、繪畫の實地授業を觀覽したり。

○卒業生の送別會 本年は、例年と其趣を異にし、本校内にて之を行ひたり。今其概況を記さん、六月廿二日午後一時、卒業生、生徒及前卒業生、日本畫科第四年生の教室に集まり、開會の辭、校長の演説、生徒總代送別の辭、卒業生答辭等ありて式を終り、能狂言、薩摩琵琶、手品、講談等の餘興あり、夫れより俱樂部に集合し、立食の宴を開き、談笑の觀を盡し、一同散會したるは、午後七時頃にして、來會せしもの、前卒業生を合せて二百餘名、なか／＼の盛會にして、幹事諸氏幹旋に盡されたるを以て、些の遺憾なかり

き。

○本校関係者の受賞 先頃上野に開きたる、東京彫工會の青年研究會に於て、本校卒業生、生徒諸氏の出品に係り、賞を得たるもの左の如し。

三等賞 烏金彫嵌野田玉川圖煙管 海野 珉乘

同 鑄銅愛猫處女置物 香田 麟橘

同 同 古代鹿鈕方耳香爐 香取 秀眞

同 同 兎置物 前島 交吉

同 牙彫鸚鵡置物 關 豊央

褒狀一等 臚銀彫春月圖卷莖入 鈴木 義彦

同 二等 金彫菊花圖根掛 海野 珉乘

因みに云ふ。同會の受賞者は一等賞一人、二等賞七人、三等賞三十九人、褒狀一等三十五人、褒狀二等三十二人、褒狀三等十四人なりといふ。

### 教室雜俎〔同〕

○圖按科 云はゞ、校中のスイート、ホームと稱す可きは、小生の科と存ぜられ候。日本畫科にせよ、西洋畫科にせよ、一科よく團結致し居るとは申せ、各教室の壁に隔てられ候如く自ら意向の異りたるふしも有之候が、本科に至り候ては、豫備より上級に至るまで、一室内に机を列べ、學び居る事故、教へ教へられつゝ、各級互に勵み居り候有様、一大圓滿なる家族とは、かゝる事をこそ申す可き事と存ぜられ候。されば下級の企て候ことにも、主旨だに正しく候へば、一科舉りて贊助致す有様にて此科の機關たる、デザイン倶樂

部なども、畢竟、かゝる結果より作り出されし事に候。此俱樂部も設立日未だ淺く候が、澤田〔誠一郎〕、十二町〔貞吉〕兩氏など、熱心に盡力致し候故、頓に隆盛に赴き、他科に迄會員を有し、進んでは、社會の需應をもみたす考に候が、そが目的とても遠からずして達し得らるゝ事と考へ居り候 猶此外にも、申上可き事は有之候が、餘は後日に申述ぶ可く候 (圖按科 K M 生)

○西洋畫科 私のクラスの人々の、異名をまだ、御存「マモリ」のない方に、御報知申上げむ。先づ一番下品なのは薄〔拙太郎〕君で、熊襲と云ふので、其云はれは其生れが九州なると、色の黒いのと夫れから、鼻と頤とに鬚とも付かず、かびともつかぬ、一種薄黒いあざがある、夫れに目付が探偵の付け相な、如何にも、日本武尊の御征伐を受申したと云ひそふなので、かく命名されたのです。次は橋口〔清五葉〕君で。理窟説明家と云はれるが、之は讀で字の如しだ。それから岡〔四郎また脩造〕君のクリスチャン、之も同上、だが一は風采の然らしむるのと、イングリッシュの上手なのより此名が、出たのと思はれる。西〔三雄〕君は、たどんと、櫻炭で此の人は、色の白(たどんよりは)いのに、なぜ黒い者に御縁があるか不思議であるが、實は顔の圓いのと、其生れが下總の佐倉であるからです。又丸野〔豊〕君、此の先生又、セコンド熊襲と云はるゝ、其れは或は薄君より適當かも知れむが、形の巖丈なる作とひげ武者なると、おまけに、生れが九州と來て居るからです。又中々の滑稽家で、いつも休む時間に同君が來ると大賑ひだ。又關〔精一〕君の無口、佐藤〔十字朗〕君のバツタ、脇坂〔安之〕君のシャムの皇太子。國澤〔時馬〕君の女形などゝ皆一通りの命名が有るが之等は後日説明し

ましやう（本一木炭生）

○日本畫科（豫備）三年の人に、笑はれたが僕のクラスは試験中、最早歸りたくを爲て休暇中、國より互ひに、手紙のやり取りや、一所に旅行をする事の話で、殆んど無中〔夢〕に成て居る。之は年の行かない折の誰れでもの経験で有うが、去年の今時は、入學試験に苦んで、其後未だ國の父兄や友達に、「美」の字の徽章の付いた帽子を、見せないものであるから、休暇も近寄た此頃は、歸心矢の如くで、魂ははや、故園の山川にさまよつて居るのも、あながち無理でもあるまいと思ふ。又之に付いてをかしな現象が起つた。それは此頃、非常に皆なが、模寫を勉強し出したが、何の爲かと聞て見ると、家へ歸つて、父兄に見せる爲だと云ふことである、以上は別に教室に關した記事でもなかつたが、此度教室へ、鳥獸の剝製を澤山備へ付けてくれたのは我々に取て非常の幸福である（豫備生）

○同一年 編輯委員にまで啓上仕り候、教室雜俎の件、當級は御承知の如く同窓大勢の事故、一々申上候も餘り複雑に涉り候へば、只今回の成績展覽會經營談とも申す可き事を記す可く候。さて、本年一月頃より展覽會の聲、校内に盛に相成候爲、常の寫生新案なども、中々注意を以て描かれ、不勉強勝の小生迄も甲の部に入る有様にて、全體優等の成績豫想外に多く、されば已むを得ず、出品は其中の錚々たる者のみを撰び申候が、之に加はりし臨畫にては牧野〔左武〕、毛利〔教定〕、前田〔千寸〕、小林〔源吉〕、寫生にては小沼〔直〕、橋爪〔成一郎〕、有安〔助二〕、榎本〔省三〕の諸君。殊に撰科の古賀〔源四郎〕君などの新案は、中々の傑作に御座候。又特に出品畫として描き候者は、牧野〔左武〕君の莊子、有安〔助二〕

君の遊鯉の圖共に本科の牛耳を執れる二氏の作として、天晴なる者に候。又毛利〔教定〕君の奮戰の圖は、一勇士陣頭に立ちて強弩を張れる有様は、平素氏が沈靜物に動せざる性格の特に現はれて、而して爲せる者と思はれ候。又小沼〔直〕君の唐美人、池澤〔義雄〕君の蘆雁、一は艶、一は清、以て場中に飾る可く、又撰科の協同より成る、十二月月など中々意匠に富みて注意を引く可き者少なからずと考へられ候。以上は只其大畧を申上候へば、同會開會の上如何に壯なるかを御覽下され度候（一年成ふみ）

○同二年 僕等の級〔松岡映丘らのクラス〕は笹島〔秀弥。三年生〕君の様に想に富で居る者は一人も無い。然し僕の様な足のよい者が居るので、豫備科〔予備の課程〕の御方々には、誠にはや御氣の毒な次第だ。全體僕等の級では日本畫科中、生徒は最も少い方で、おまけに、柔和な、人達計りであるから、團體に勢力を扶植しやうとか、拔驅けの功名を爲様とか云ふ野心に苦めらるる、御利巧者は無い。其理由からでも有う、校中で最も注意を惹かれない級ではあるが、同級生が、御互に隔心がなくて、善良なる家庭の様に、相敬ひ、相親んで居るのは、恐くは、他の級では味ふ可からざる快樂を、享けつゝあるのだと信じている。我級では勿論、ローマンチックが洒落るとか、ミウジックが、囀るとか、云ふ通人は居らぬが、其代りに、熱心に忠實に、勉強さへすれば、他日の報酬は決して、小さい者じや無いと、信じて居るので、先生様なども今の二年級が、一等世話が焼け無いと、思はれて居る様子が見える、是は決して自惚でもあるまい

○同三年 正午の休みの折、入口の柱の所で三角定規と物差を持つ

て、皆の丈を計つた。所が一番丈の高いのは、金原〔利一〕君の五尺五寸六分で、最も高からざる者との差は五寸六分〔以下語句欠落か〕の誰やらだ、それで其平均数は井芹〔市次〕君の二寸六分と葛〔揆一郎〕君の三寸の中間で有つた。其内長谷川〔緑邦〕君獨りだけは計らないから、無理に勧めて見ると、下から三番目に位して居た、所が自分は非常に喜んだから、聞て見ると實は、下から次だと思つたからだそうで有る、又計つた全體の生國に依て、東北、中部、西南の三部に分けて計算して見ると、西南の四寸強中部の三寸八に比して東北は僅かに五尺一寸弱の平均數を得たから、餘り不思議と其人々を記して見ると、丈けでは級中でコンマ以下に數へられて居る、西方〔俊造〕、長谷川、光井〔湛常〕、笹島〔秀弥〕、志和〔舜了〕の五君と、三寸以上は只横山〔為雄〕、葛の二君だけで有つたからだ。〔三年江邨〔永倉茂〕〕

○西洋畫科油繪教室 今般研究生に自畫像を描かせたるに就て、本年の四年生競技にも、自畫像と相成候は甚だ喜ばしき<sup>マコ</sup>を事にて、以來はこれが例とも相成候か。不吉の事を申すやうなれど、無常は争はれざれば、我が先か、人が先か、其節は永く校内に残居候自畫像に對して、昔を忍ぶことも多かるべきかと推せられ候。

今年の競技程、雲を攫むやうなることは、從來無之事にて候、始め競技は無之と、さる人の公然申されたるに付、安心致居候處、突然揭示有之、一二年生は木炭畫油畫何れにても撰び、四年生は十二號の景色と相成候故、其用意致候處、さて愈競技の初日となり、一二年生は木炭畫、三年生は廿五號の全身裸體、四年生は自畫像と、またも突然變更せられ、已に四年生など旅行せし者には端書を出す

など、何と申して宜敷きやら、生等は其辭を發見難致候、競技と言へば、其れ／＼の用意生等の貧生には一方ならず迷惑致申候。

今度來りし畫の具の分配法は、甚だ其當を得ざりし爲、物議紛々、殆んど腕力沙汰にもなりなん有様、以來は何とか良法を講じ、惡例を残さぬやう致度ものに御座候。〔同科一年には橋口五葉、和田三造等、二年に青木繁、熊谷守一、橋本邦助等が居た。〕

東京美術學校近事〔一一三。M・三五・一〇・一五〕

○前號掲載後に於ける、職員の動靜左の如し

六月三十日。教授川端玉章、同高村光雲の兩氏勲六等に紋し、瑞寶章を授けらる。

七月廿五日。教授高村光雲、助教授黒岩倉吉の兩氏は、農商務省の依頼に係る第五回内國勸業博覽會場内美術館前に設置せらるべき、噴水塑像製作監督を、教授竹内久一氏は、同會附屬水族館前に設置の同製作監督を、助教授沼田勇次郎氏は、同水族館に付設せらるべき噴水銅像並水盤原型製作監督を、助教授津田信夫氏は同銅像並水盤鑄造主任を命ぜられたり

八月十七日。助教授櫻岡三四郎氏は、依囑製作事業に關し、宮城縣へ出張を命ぜらる。

同月廿五日。助教授津田信夫氏も、亦同事業に關し、宮城縣へ出張を命ぜられたり。

八月二十一日。先年佛國に留學中なりし、本校教授淺井忠氏、無事歸朝せらる。

九月十一日。教授淺井忠氏は、京都高等工藝學校教授に轉任し、

高等官五等に叙せらる。

同月十三日。日本畫科卒業生結城貞松氏は、本校日本畫科授業を囑託せられ、助教授黒岩倉吉氏は農商務省依囑博覽會美術館前に建設せらるべき噴水塑像製作監督の爲大阪府へ出張を命ぜらる。

同月十五日。囑託教員鈴木繁吉氏、願に依りて囑託を解かれたり。同日玉田文作氏體操教員として、本校助教授に任ぜられ、  
教務掛兼庶務掛を命ぜられたり。

○第十一回卒業證書授與式 七月二日午前十時より、本校々友俱樂部に於て舉行したり。當日の來賓は、菊池〔大麓〕文部大臣、岡田〔良平〕〔文部省総務局長官〕總務長官、松井〔直吉〕實業學務局長、土方〔久元〕伯爵、手嶋〔精一〕高等工業學校長、久保田〔鼎〕帝室博物館主事、其他卒業生の保證人、前卒業生等數十名にして、席定まるや、正木學校長は式辭を述べ、各本科卒業生に卒業證書を、各撰科及圖畫講習生に修業證書を、來學年の特待生に、證狀を授與し、次に本學年の精勤者に精勤賞狀を與へたり、此賞狀授與の際、正木學校長は、日本畫科を修了したる鈴木久治が、既往三年間一日も缺席せずして、能く學藝を勵みたるは、衆生徒の模範となすべきなりとして、特に來賓に紹介せられたる後、卒業生に對し一場の演話をなし、將來の心得に就きて、警告せらるゝ所あり。次に菊池文部大臣祝詞を朗讀せられ、卒業生總代岡村吉樹氏答辭を述べて式を終り、各休憩所に於て、來賓に茶菓〔茶〕の饗應ありたる後、來賓一同各科生徒成績品の陳列場を縦覽せり 當日文部大臣の祝詞并に卒業者姓名は左の如し。

### 菊池文部大臣の祝詞

本日東京美術學校第十一回卒業證書授與式を舉行するに當り聊か平素の所懐を據べて卒業生諸子に警告する所あらむとす 夫美術の上乗なるものは能く民衆の情趣風尚を導き崇高純潔の□に□〔欠字。この部分は本校の記録文書「自明治卅五年 卒業式ニ於ケル祝辭及答辭」に「域に臻」とある〕らしめ得へく又百般の工藝は美術の指導に依りて其製作の品位を高め得へし 故に美術は實に治平の要道にして又工藝製作の淵源といふへし 是を以て美術の至寶は之を愛惜尊重せざる可からず美術の作家は之を保護獎勵せざる可らず 而して美術の傳統を繼承し更に之を進歩せしむるは最も急要の事に屬す 此故に國家は其急要なるのより先に著手して美術學校を設け往を繼ぎ來を啓くの途を講せり 諸子は多年此校に學び今や所定の課程を修了して各其の道に就かむとす 諸子の爲に深く慶賀する所なり 想ふに五年の星霜は長からざるにあらず 諸子の學ひし所極めて多からむ 然れども美術家の事業は其の極致に達するときは一國民俗の崇卑も工藝の隆否も其の手腕に繫かることを思へば諸子が今修得したる所は長途の第一程に上れるに過ぎざることを知らむ 諸子が美術の能事を了すると否とは偏に今後の奮勵如行〔如何を力〕と願ふのみ 諸子斯れを勉めよ

### 第十一回卒業者姓名

川村孝、山邊知臣、足立啓、岡村吉樹、菅季吉、大智恆一、秋保親美、古田土貞治、伊勢寛一、小貫廉、高橋來平、綾見外也、中島次郎（以上日本畫科）

鹽見鏡、山田榮吉、大東昌可、内野猛、松原康雄、小西正太郎、小笠原丁（以上西洋畫科）

水谷鐵也、高村光太郎、島宗磨瑳雄、石川成録、山本筍一、細谷三郎、柴野健作、宮原顯藏（以上彫刻科）



小岩峻（漆工科）

淺野春二、金井忠三、後藤浪吉、大聖寺宗三郎、田中忠彦、鈴木久治、横山新太郎、高井清（以上日本畫撰科）

宇和川通諭、戸田謙二、池上甚三郎、森川松之助、時任雕熊、佐藤均、前田慶二郎、岡野榮、大八木一郎、吉澤喜作（以上西洋畫撰科）

後藤良、今戸精司、佐藤利三郎（以上彫刻撰科）

寛定次、中里則光、加納秋三、伊澤貞吉（以上彫金撰科）

袖木房吉（鍛金撰科）

伊藤龍吉（鑄金撰科）

岩瀧多磨（漆工撰科）

松本弘、金井義司、瓜生英夫（以上圖畫講習科）

○新入學生 本學年即ち九月より、本校へ入學したるものは左の如し。

佐藤勉、秋葉鎌三郎、斯波義辰、山田廉、榎本彦、伊藤貞夫、小泉勝爾、南薰造、近藤治義、荻生守俊、三野雅一、陳内貞義、八巻於兔三、櫛田利雄、兒玉末男、日高島助、古賀嘉六、永田二郎、多賀谷健吉、寺崎武男、渡邊行義、三橋信吉、坂谷良之進、小倉右一郎、君島金三郎、鈴木台岸、松田茂、江村清三郎、久保薰歎、磯野壽吉、佐々木璋松、小畑橘策、中村武平、福田淡、五島健三、飯島保治郎、西岡純平、中西信一、吉田祥三、松野芳太郎、高橋直八、加藤直泰、後藤經一、金田顯吉、小倉三郎、岡直道、山川茂雄、吉田秀男、吉田政一、安江雅勝、松本誠三、馬場石、水野四郎、四十物彌市、佛島實教、永榮定義、鹽崎一郎、馬場幸生、和知忠禮、猪飼俊二、安村行雲、服部憲夫、大塚豊三郎、熊谷基、秋山政三、原田謹次郎、藤井浩祐、平井武雄、武田榮（以上豫備ノ課程へ）

三浦孝、勝田良雄、平松能太郎、平木彌一郎（以上日本畫撰科へ）

森田恆友、野口峯吉、岡應助、内村愛助、富岡伊三郎、榎本邦三、大槻式雄、山本鼎、正宗得三郎、今關胤雄、市川誠一、大給近清、村上爲俊、白石祭治、兒島虎次郎、伊藤直和、荒木芳男、高木誠一（以上西洋畫撰科へ）

杉浦恭二（圖案撰科へ）

田中良雄、服部宗作、小川星平、川上邦世（以上彫刻撰科一年へ）、來海篤次郎（同二年へ）

藤島三郎、白鳥茂昌（以上彫金撰科一年へ）、前田耕治（同二年へ）

鈴木清（鑄金撰科一年へ）

澤口悟一、市島富太郎（以上漆工撰科一年へ）

本間良助、和田元三郎、田中只八、菊地整吾（以上圖畫講習科へ）

○御買上の卒業製作の再製作 嚮に本紙第一號に記したる如く、森田豊次郎、前波覺次郎、前川佐一の三氏の卒業製作は、宮内省より御買上の榮を蒙り、現品は當時既に、同省へ納付したるが、今般藝術上の獎勵の爲と、本校への保存の目的とを以て、同一圖題に依りて、更に製作すべき旨、夫れ々本校より達せられたり。

○本年卒業製作の再製作 本年卒業者中の、金井忠三氏（號一章）の卒業製作山水圖は、展覽會に於て、古川市兵衛氏の懇望を承けたるに依り、更に同一畫題にて、揮毫中なり。

○彫刻科中教室内の模様替 木彫牙彫兩教室の疊敷を改めて、机腰掛にて教授するの議ありし由は、曾て記載せし所なるが、本學年より、愈々之を實行せり。

○生徒の増加と建物の引移し 圖按科及彫刻科生徒の増加と共に、從來の教室にては、不足を告げたるを以て、假入學生の毛筆畫教室（元圖按科教室）を文庫と新館との間に引移し階上を圖按科にて、



階下を彫刻科にて、使用することとなり。

○本校の改築 本校は元の教育博物館を襲用せしものにして、技藝を教授する學校に適せざるのみならず、明治十年の建築に係り、漸次腐朽に赴くを以て、數年前より、改築の計畫ありしも、未だ其運びに至らざりしが、文部省に於ても改築の必要を認められ、其豫算拾五萬圓を、本年の議會に提出することに内定せし由。

○下村櫻岡兩氏の留學 教授下村晴三郎氏は繪畫研究のため二ヶ年間英國に、助教櫻岡三四郎氏は、鑄金術研究の爲三ヶ年間米國及佛國に、各八月一日付を以て留學を命ぜられ、來年一月渡航の途に上る筈なり。

○久米教授の西洋考古學 久米〔桂一郎〕教授は、本校生徒の參考用として、其講授にかゝる、西洋考古學の稿本を印刷に付せられ、生徒卒業生にして望みの者に頒たれたり。

○博覽會教育館内の地坪割付 本校に於て、第五回内國勸業博覽會教育館内へ、成績品を出陳するの計畫ある事は、曾て記載せし所なりしが、其要求坪數三十六坪に對し、今回農商務省にて割付けたる坪數は、纔に十坪五合なるを以て、到底各科の作品を出陳する能はずとて、更に改案中なりと云ふ。

○學科の増課 本學年は從來各科に課したる學科の外、數多學科の増課したるあり、即ち日本畫本科三年に木炭畫を、各科一年に英語佛語を、豫備の課程圖按志望者に用器畫法を、同志望者及圖按科一年に造型を、日本畫科四年及西洋畫科二年彫刻科彫金科鍛金科鑄金科の各二年に美術解剖を、鑄金科に機械工學大意を課したる等な

り。

○三年生の木炭畫 前學年に於て、日本畫科第四年生の教員志望者に、木炭畫を課し、學修せしめたる結果良好なりしを以て、本學年よりは、同科三年生にも之を課したり。

○本校設置紀念日 本月四日は、本校設置紀念日なるを以て、昨年の如く職員生徒一同並に在京卒業生を招きて、校友會俱樂部に集合し、其式を行ひたり。

○生徒の修學旅行 毎年施行せらるゝ、各科四年生奈良京都の修學旅行は、下村〔晴三郎〕教授、黑岩〔倉吉〕助教、關囑託教員、羽田〔禎之進〕助教付添ひ、去九月二十四日、東京を出發せり。

○筆記用紙 美術解剖、西洋美術史、西洋考古學の筆記用として、一定の紙を用ふることにせり。

○陶器窯の寄附 陶器作家堀川香山氏は、竣工の上は隨時借用の條件を付し、陶器窯を本校内に作り、之を寄附せんとて海野教授〔美盛〕沼田〔勇次郎〕助教に謀りしに、兩氏も工藝科塑造の製品に利せんとて賛成し、本校に願出て、許可を得たるに依り、去る七月下旬より、鑄金科の裏の空地に築造を初めたりしが、此程竣工したり。

○仙臺昭忠標の鑄成 兼ても記したる同標は愈先月中旬鑄成したるを以て、櫻岡〔三四郎〕津田〔信夫〕の兩教授は、之れに従事したる卒業生職工と共に同地に出張し、目下建設工事を取急ぎつゝあれば、竣工の報に接するも近日の中にあるべし。因にいふ同標の金鵝は、羽亘り二十二尺、目方千有餘貫もあるものなれば、運搬にも非

常の仕度と人夫とを要する事にもあり、且從來曾て有らざることなるが故に、同地にては評判甚だ高く、旗を立て、之を曳くなど、殆んど祭禮の如き騒ぎなりしといふ。

○博覽會の噴水器 此圖案を本校に於て、農商務省同會より依託を受けたることは、前號報ぜし處の如くなるが、其後猶又製作方の依託をも受けたり。博覽會に於ける噴水器は計四個所にして、一は美術館前、二は機械館と教育館中央、三は堺市公園中央、四は堺市水族館前なり、是に於て本校にては、夫々製作監督及製作擔任者を命じて、暑中休暇を利用し、先つ一と三の噴水器原型の製作に著手し、其一分は原型出來したるを以て、監督黒岩〔倉吉〕助教授は、現物製作の爲、製作者と共に、去月十四日出發、大阪に赴きたり。其設計作者等を畧記すれば左の如し。

#### 一 美術館前の噴水器

美術館前に當り、館を離るゝこと、凡そ十間にして、圓形の第一噴水池を置き、其れより地面の傾斜せるを利用して、長方形の第二噴水池を置き、之れに三個所の瀧を落して、第三の噴水池と連絡し、此池の中央及び左右の三個所に噴水を裝置す。即ち第一噴水池は、圓形徑六十尺にして、中央に幅廿尺總高十四尺の巖島を造り、丈六の觀音此巖上に踞し、左手に柳枝を持ちて、膝下に垂れ、右手に水瓶を捧げて俯瞰し、瓶口より噴水せしむ。巖下周圍に三人の童兒と、四羽の鷺鳥と、貳尾の游龜あり、其一人の童兒は、手に水盤を捧げ、觀音の水瓶より瀉下する無量慈悲の功德水を承け、一人は鷺鳥を逐ふて嬉戯し、一人は轉けて水を弄ぶ態を現はし、鷺鳥の嘴よりも噴水す、是れ第一噴水池の結構なり。

第二噴水池は其幅二十二尺長七十六尺にして、此間に幅十二尺高二尺の瀧三ヶ所あり。第三噴水池は幅七十尺心字形にして、三個の噴水あり、其の高さ二十尺餘なり。而して前陳三個の池の周圍は、總て高さ三尺の人造石壇ありて、拾八個の花鉢臺を備へ、各種の草木を植うるの用に供す。其他池畔に於ける樹木の植付けの如きは、實地に就き、前後の釣合を計りて配置するの計畫なり。此設計圖案は本校助教河邊正夫氏の手になり、高村〔光雲〕教授を主任とし、黒岩〔倉吉〕助教授監督の下に於て、彫刻科卒業生渡邊長男、青木外吉、水谷佳園、山崎和沾の四氏之が製作に従事し、原型（雛形）及現尺の童兒、鷺鳥、觀音の一部等、既に竣成し、大阪へ向け回送したり。

#### 二 機械館教育館中央の噴水器

建築的の噴水器にして、博覽會正門と、美術館前の噴水器との中央に建設せらるべきものなり。クラシック式に則れる高塔にして、四方より同じき觀望を得べし、塔の高さ七十五尺、正面の幅三十八尺、其中央に高さ十八尺幅十二尺の瀑布を瀉下し、内部に七色の電氣を仕掛け、廻轉機を設けて其色を變化せしめ、之を瀑布に照射せしむる計畫なれば恰も天より七色の瀑を落すの美觀あるべく。此他尙塔の裝飾の部分には、悉く電燈を設くといふ。この噴水は直徑十八間の凸凹形を爲せる池の中央に、建設せらるべきものにて、塔の周圍にも別に八個の噴水を建設すべし。水量は單に水道のみにては、不足を告ぐるを以て、五馬力の蒸氣力を假りて、昇降旋回を自在ならしむる筈なりといふ。圖按者は本校助

教授千頭庸哉氏にして、此分は博覽會事務局に於て製作建設すべきものなり。

### 三 堺市公園中央の噴水器

是亦本校助教授千頭庸哉氏の考案に成り、水族館前面徑三十尺の池の中央に建つるものにして、龍神捧珠の狀なり。龍神高さ八尺五寸、右手に珠を捧ぐ（珠は電燈を以て之に擬す）足下に圓柱あり、高さ十五尺、其上部の周圍に八個の龍口を設けて、噴水せしむ。總高さ八角形の臺共二十八尺五寸鐵柵を以て之を繞らす。此製作監督は竹内〔久一〕教授、製作者は彫刻科卒業生本保義太郎、長愛之、細谷三郎の三氏にして、既に原型（雛形）の製作を竣り、目下現物製作に従事中心なり。

### 四 堺市水族館の噴水器

水族館二ヶ所の入口の中央を測り、其内を「ニッチ」にして、此處に水盤を設く、高さ一尺五寸、盤上巖を設け、童子をして之に立たしむ、此童子は兩手を以て具を捧げ、龍口より瀉下する水を受くるの姿なり。本校助教授河邊正夫氏の考案に係り、同沼田一雅氏は原型製作を、同津田信夫氏は鑄造を命ぜられたり。

○久能山の修繕事業 久能山東照宮の唐門外三ヶ所修繕監督の爲、靜岡縣知事を経て同山社務所より、本校職員の出張檢分を請求し來りたるを以て、本校に於ては、竹内〔久一〕教授、辻村〔延太郎〕助教授を撰定し、出張せしむることとしたるが、竹内教授は製作上の都合に依り、先以て辻村助教授のみ、去月初旬出張して檢分したり。

○古社寺寶物修繕の結了 本校に於て、滋賀縣社寺より標題の事業を引受け、昨年十一月末、出張員一旦歸京し、本年四月十三日、復ひ林〔美雲〕助教授及卒業生松原象雲〔明治三十年彫刻科卒〕、野口藤三郎〔同三十一年同科卒〕の三氏出張し、修繕に従事しつゝありし由は、曾て報せし所の如くなるが、本年七月に至りて全部竣成し、同月廿三日一同歸京したり。後日の参考にもがなと思ひて、修繕したる寶物を茲に掲ぐることにせり。

- 一千手觀音 立像一軀 大津市 園城寺
- 一智證大師 坐像一軀 同 同
- 一新羅明神 同 一軀 同 同
- 一吉祥天 立像一軀 同 同 同
- 一護法善神 同 同 同 同
- 一十一面觀音 同 同 同 同
- 一毘沙門天 立像一軀 滋賀郡 石山寺
- 一不動明王 坐像一軀 同 同 同
- 一天命開別命像 同 同 同 同郡膳所石座神社
- 一伊賀采女子媛 同 同 同 同
- 一弘文天皇 同 同 同 同
- 一彦座王 同 同 同 同
- 一釋迦如來 坐像一軀 同 圓福院
- 一聖觀音 立像一軀 同郡坂本 西教寺
- 一藥師如來 坐像一軀 同 同
- 一釋迦如來 立像一軀 同 同 延曆寺
- 一阿彌陀如來 同 二軀 同 同

一 四天王	同	四軀	同	同
一 不動明王	同	三軀	同	同
一 光定大師	坐像一軀	同	同	同
一 不動明王	坐像二軀	同	同	同
一 十一面觀音	立像一軀	同	同	來迎寺
一 地藏尊	同	同	同	同
一 十一面觀音	同	同	同	盛安寺
一 阿彌陀如來	立像一軀	同	同	寶光寺
一 日吉神社額	三 個	同	同	日吉神社
一 阿彌陀如來	坐像一軀	同郡膳所	清徳院	
一 聖觀音	立像一軀	大津市	乘念寺	
一 不動三尊	同 三軀	滋賀郡石山村	正法寺	
一 地藏尊	同 一軀	同	同	
一 駒犬	二 個	栗田郡	大寶神社	
一 藥師如來	立像一軀	同	寶光寺	
一 藥師三尊	三 軀	同	蓮臺寺	
一 阿彌陀如來	立像一軀	同	淨光寺	
一 同	同 同	同	觀音寺	
一 同	坐像一軀	同	光傳寺	
一 聖觀音	立像一軀	同	帝教寺	
一 阿彌陀三尊	三 軀	同	常善寺	
一 地藏尊	立像一軀	同	蓮海寺	
一 虛空藏	坐像一軀	同	金勝寺	
一 藥師如來	同 同	同	善勝寺	

一 地藏尊 同 同 山口寺  
 一 彌陀 立像一軀 同 正徳寺  
 一 同 同 同 敬恩寺

。印を付したるは、最も優秀のものなりと云ふ。

○ライオン齒磨商標の製作 同齒磨を第五回博覽會へ出品するにつき、其商標のライオン製作方を本校に依頼せり。獅子は鑄銅にして高さ二尺三寸、臺は蠟色髹漆にして文字蒔繪あり、其高さ七寸許なり。圖案は助教授千頭庸哉氏、原型は同沼田一雅氏、鑄造は同津田信夫氏擔任なりといふ。

○臺灣神社の釣灯笼 こは近衛師團より、臺灣神社へ奉納するものにして、今回本校に於て製作の依託を受け、平田惣之助氏（號宗幸）之が製作に著手せり。灯笼高さ二尺五寸、火袋の幅一尺、四方は唐草模様の中に、菊花御紋章の透し彫なり。全躰黒味銅製にて御紋章には鍍金を施す。

○本校關係者の受賞と御買上品 東京彫工會の第十七次競技會に於て、本校關係者諸氏にして、賞を受けたるもの、及び宮内省の御買上品となりたるもの左の如し。

- 銀 賞 牌 龍銀海邊圖名刺盆（鈴木源助出品） 海野 勝珉
- 牙彫人物圖卷簾入（片岡儀三郎出品） 石川 光明
- 銅 賞 牌 塑造化粧娘置物（宇田川和雄出品） 前島 交吉
- 同茸符 白金製清風明月意手釦（沓谷次郎出品） 本保義太郎
- 海野 勝珉

銀製瀑ニ虎圖卷莨管 (齋藤嘉助出品)	同	人
赤銅野田玉川圖煙管 (金子直吉出品)	海野	珉乘
鑄銅虎置物 (共鑄會出品)	海野	美盛
牙彫鹿圖卷莨入 (櫻井榮藏出品)	石川	光明
襖狀一等		
石膏製彫刻みをつくし	水谷	佳園
塑造躡蹠	毛利	教武
彫金素銅筍圖前鉸 (金子直吉出品)	海野	勝珉
同金製櫻圖山水圖手鉤 (櫻井榮藏出品)	同	
同同玉川圖手鉤 (片岡儀三郎出品)	同	
同同山水圖時計 (江澤金五郎出品)	同	
同龍虎圖手鉤 (片岡儀三郎出品)	同	
同銀製山水圖湯沸 (江澤金五郎出品)	海野	珉乘
鑄銅親子能置物 (交義會出品)	平塚駒次郎	
彫金百合花前鉸 (中里則長出品)	中里	則光
襖狀二等		
石膏製彫刻太郎 (高村光雲出品)	今戸	精司
彫金龍銀製蓬萊圖手筥 (關口一也出品)	岡部	覺彌
襖狀三等		
彫金金製菊圖根掛 (杵谷瀧次郎出品)	海野	珉乘
牙彫狎置物 (金田兼次郎出品)	關	豊央
御買上品		
彫金金製櫻圖山水圖手鉤	海野	勝珉作
同海邊圖名刺盆	同	人作

牙彫鹿圖彫刻銀製卷莨入 石川 光明作  
 金製楓林停車圖手鉤 豊田 光吉作  
 同文房四友圖彫刻手鉤 海野 勝珉作  
 宣徳銅虎置物 海野 美盛作  
 彫金銀製莨匣 加納 秋三作

教室雜俎〔同〕

○西洋畫科 前號に僕のクラスの面々の異名を紹介されたので、つみの無い吾々までが飛んだ新冠詞を附せらるゝに至つた。併し異名は天の云はしむる所とかで、或る場合には、中々興の有る事とも思はれる。誠に豊太閣が未だ猿面冠者の青年時代に於ては、誰も將來天下を掌握す可き大偉人で有るとは、想像しなかつたらう、して見ると吾々の異名は又、未來各自の或一方に切りぬける豫言で、又各自が左の様な色々のチャンピオン連であるのを見ても、其餘裕の有るのを察し給へ。まづ薄〔拙太郎〕君の筑前瑟琶は流石お國のものだけあつて、其慷慨悲壯の歌が優麗艶雅の曲によく調和して、中々の聞きものだ。橋口〔清・五葉〕君はトランプのチャンピオンで、薩摩瑟琶も日外の何かの會で拜聴した。岡〔四郎または脩造〕君の英歌獨奏、此れも何かの會で拜聴、實にうまい。以上三人共に、テニス部の御大將。西君テニス一點張りブランコの達人。關〔精一〕君は寡言黙行の君子、従つて、僕は君のお得意のものはトント存じない。丸野〔豊〕君各方面にヒケを取らぬ剛のもの、殊に和歌は最も御得意なるもの。佐藤〔十字朗〕君くだらぬ遊戯には我不關焉で熱心に宗教的方面に向つて研究して居られる。脇坂〔安之〕君何で

も御座れ、詩吟謠曲、碁は其最なるもの又テニス部の重鎮。以上大鉢様なものです（西洋畫二年X生）君そんなに口説き給ふな、我科實習の採點は實際當を得て居るのだ。一鉢藝術の完成は殆んど無限なもので、採點する教員自らも研究中じやないか。尤も或る科の採點こそ何だか小學校めきて安賣だが、敢て高等の技藝學校の點數の様に思はれないのは、君や僕計りの言ふ所でない（西洋畫生）

○彫刻科 多忙にて投書し能はざりしを我科の諸彦に謝す（彫刻科宮原〔頭藏〕）

○日本畫科寫生の時間は樂みの代りに、夫れ相應の苦心を要する様である 由來此の級の寫生には、種々の流派が試みられて、其内成功したのも、失敗したのもある、其の中最も普通なのが有線畫で黒線と色線との二種で、之れに對して無線畫の一派も有つて、其の中に、線は有つても強度の色彩の爲めに、目立たない様に爲てるものもある。デ無線派は、一名朦朧派と呼ばれて、大村〔友雄・素峰〕君が元祖になつて居る、その派が稍や流行して勢力を得て居つたので水上〔泰生〕君の樂面の朦朧的寫生等は成功に近いもので有つた。此の派の盛んに、行はれて居る間に斬然として黒線の強い勾勒を採り、寫生に、新按に、四條風の健筆を振つて居たのは町田〔五一〕君である。さて、其餘は朦朧に屬するか、四條派に歸するか、但しは雜種に従ふか、まだ宇宙に迷ふて居る亡者連で、今後の濟度如何に由りて、成佛さるゝ事であらうと思はるゝ（一年生某）

休暇を終りて間も無く候へば、記事とても別に無之候故、うめ草集とも名付けて少々申上可く候。さて新たになりたる級名も、未だ言ひ馴れぬ故か、耳ざわりに候。當級も來る廿四日より奈良、京都へ

修學旅行を致すべく候、此一行は本科全鉢、撰科も多數赴く由に候。されば歸校後は各自研究の結果、定めし有益なる記事の、本誌に投書せらるゝ事ならんが、又珍奇の材料なども澤山もたらし來る事と存じ居り候、又暑中休暇中腹卷〔勝太郎〕氏は五家の莊へ、金原〔利一〕氏は日原地方の勝を探り候由。然し前氏は炎天旅行には、中々修業を積みし男に候へども、金原氏は、殆んど初陣とも稱す可き程にて、定めし失敗澤山と豫想候處、按の如く、連日の霖雨にて命からん、歸京の由とは誠に痛々しき事に候。又長谷川鑛毒先生〔綠邦〕も久々の歸國にて一時は氣焰萬丈、當る可からざる勢に候由なれど、中頃より病氣にて、之も早々歸京致し候由。其外功名談として傳ふ可きは、田中秀客〔和一〕氏にて、同氏は信州小諸在の布引觀音格天井に、洋畫の三井〔由太郎〕氏と、山水密畫を描かれ候由、誠に例の快辯と健腕にて、僧侶等を感服せしめし事と思はれ候。然し聞けば都育ちの貴公子と誤られ、強力に莫大の賃金を貪られ候とは、氏にも似合ぬ失敗と存じ候。此外旅行好きの中島〔重丸〕氏が、例の破天荒的計畫もと思ひ候處、豫想外にも、市外には一步も踏み出さず、且は病氣にさへかゝり、打ふし居られ候事も有りとは、げに世は様々の事に候。誠に世は變化多く、云はゞ革命の小生の級程烈しき處は無之、一人にて、二年と首席を占め居り候者は無之、始めに、西方〔俊造〕氏、次に笹島〔秀弥〕氏、余、又今年は末席たりし葛〔揆一郎〕氏の一躍して首席を占め候など、定めし來年卒業製作には意外の人の、桂冠を得候事と推察致居候。同氏にて思ひ出し候が、去る七月成績展覽會の折、最も世人の注目を惹きし、「我が教室」の、餘りに、腹卷氏、笹島氏、殊に下村〔觀

山」先生などの趣を得られ候故、先生などは、早足に其前を通り過ぎられ候が、平素無口の氏の製作として、大膽の程をかしく候。又此頃一級を通じて、天平時代研究盛に相成り、其原因としては、吾人は知り申さず候へども、畢竟繪畫は、忠誠たる己の思想、萬象に對して、溫き同情を現す可き者と、覺悟せし結果と覺え候、色々日本畫の未來に付き、議論など申す人も有之候が、未來を測定致さんには、自然過去を進究す可き必要の出で來る事と思はれ候。誠に我が一千餘年間の美術史の上に於て、以上の精神の盡く發揮され候は實に天平を除きては、他に得られざる事と覺え候が、されば、かのミケランジェロなどが、始めて古希臘羅馬の神品に接したる時に於て、必ずや歡喜の叫びの、以てそれ等の光明を賞讚したらむ結果より、かのレナサンスの新時代も産み出されし事と覺え候。然し、何も吾々には日本畫の將來に對し、ミケランジェロの研究法を、くりかへすわけには無之候が、歸する所は、此邊に至る事と思はれ候。何にせよ眞面目の研究法の盛に相成候は非常に喜ぶ可き現象と思はれ候。其結果として描法は申すに及ばず、色彩の配合調和などに苦心する様に相成り、今は重に水繪具にて之を試み候が、又化學的に或る新顔料など製出致し試み候者も有之候が、未だ研究時代に候故、結果の良否は聞き申さず候へども、成功候上は公にせらるゝ事ならむと思ひ居り候。埋め草の名にそむかず順序なく書き記し候へば宜敷御推讀有らん事を願ひ候（四ノ江邸〔永倉茂〕）

#### 東京美術學校近事〔一—四。M・三五・十一・一〇〕

○職員の動靜 前號掲載後の分左の如し。

九月二十日、教授島田佳矣氏、正八位に敘せられたり。

同月二十二日、平塚駒次郎氏、本校雇（助手如故）を命ぜられたり。

同月二十五日、工科大學助教加茂正雄氏へ鑄金科に課する、機械工學大意を囑託せられたり。十月十四日、學校長正木直彦氏、京都大阪の二府へ出張を命ぜられ、十七日出發せられたり。

○十月廿一日、教授高村光雲氏は、博覽會噴水器製作工事實地監督のため、大阪へ出張せられたり。

○十月廿二日、囑託大村西崖氏は、本校教授に任せられ、高等官八等に敘せらる。

○和田英作氏の名譽 文部省留學生なる、本校西洋畫科助手和田英作氏は、本年巴里のサロンに日本婦人の肖像〔「思郷」本学蔵〕を出品し、鑑査の上受取られたりといふ。

○本學年の特待生と前學年精勤者 前號に記載し漏したるが、本年七月二日卒業證書授與式場に於て、前學年中學業を精勵したる廉によりて、精勤證書を授けられたるものと、學業品行共に優等に付、本年九月より一學年間の授業料を免除せられたる特待生左の如し。

特待生 十一人

西洋畫科一年 森田龜之輔

日本畫科二年 毛利 教定

圖按科二年 十二町貞吉

日本畫科三年 松岡 輝夫



彫刻科二年 竹内 友吉 圖按科二年 澤田誠一郎  
 同科四年 遠藤 忠雄 彫刻科二年 竹内 定吉  
 漆工科三年 堀井 政吉 漆工科二年 常木 新藏  
 漆工科一年 芳賀 晋三

精勤者 八人

豫備之課程 相馬 正巳 日本畫撰科四年 鈴木 久治

日本畫科四年 秋保 親美 西洋畫撰科一年 野田 昇平

圖按科一年 澤田誠一郎 西洋畫撰科三年 立見 淑

彫刻科四年 水ノ谷鐵也 西洋畫撰科四年 大八木一郎

○學科増設 今回鑄金科生徒全躰に鑄金術を課し、津田〔信夫〕助教授の擔任にて、十月下旬より開始せり。

○蒔繪圖案に關し生徒の受賞 日本漆工青年研究會に於ける圖案課題、櫛笄菊の意圖案にて、左記兩氏は賞を受けたりといふ。

一等賞 岡本尙市 二等賞 常木新藏

○久能山の修繕事業 同山東照宮の唐門外三ヶ所修繕監督の爲、辻村〔延太郎〕助教授の出張したるは、前號記載せし所なるが、十月二十八日竹内〔久一〕教授も出張檢分せられたり。因にいふ、今回の修繕事業は、古社寺保存費を仰ぐに非ずして、同山保存費の利子と、寄附金とによりて修繕を爲すものなりと。

○日本漆工會及同青年會の受賞 本校に關係あるものにして、賞を受けたるは左の如し。

日本漆工會の分

二等褒賞 五行草の圖卷 葛入

日進塗料工場

同 蠟色塗圓盆

菅原 精造

日本漆工青年會の分

二等賞 瞿栗圖卷 葛入 石井 汲月

五等賞 春慶塗波千鳥圖卷 葛入 福田 東嶺

○修學旅行者の仕合せ 聞く所によれば、本校各科四年生の一行、奈良京都へ修學旅行中、奈良にては本校卒業生新納忠之介、菅原大三郎、野口藤三郎、中島袈裟彦の四氏、東大寺三月堂の國寶修繕に従事中之事として、大に便宜を與へられ、京都にては北垣男爵の令息北垣確氏、一行の爲に熱心盡力せられ、特に十月九日一行を同邸にて



修學旅行記念 明治35年10月9日 北垣氏邸にて

前列左より 北垣家家族、速水不染、永倉茂、遠藤忠雄、小場恒吉、笹島秀弥  
 後列左より 横山為雄、岡四郎、関保之助、北垣確、腹卷勝太郎、下村觀山、沢津昌利、中島重丸、葛揆一郎、神子鉄雄、久野龜之助、高山六郎、西方俊造、野村陸雄



招待し、同家祕藏の書畫及建築等を縦覽せしめ、且懇篤慰勞せられたりといふ。

### 教室雜俎〔同〕

○日本畫科 今度の修學旅行で、僕のクラスの傑物連に、又々別に面白い渾名が附いたから、一つ御披露に及ぼう。先づ青濤君は奈良で即功紙と云ふ名が附いた。その譯は例のひも止めの靴だに依て、着く早々足に豆を踏み出し、宿の下婢を呼んで即功紙を買ひに遣つた、茲に君の不注意であつたのは、即功紙を何枚と指命せなんだ、暫くすると、下婢は受取つた十錢の即功紙を買て來た。呆れたのあきれ無いのつて、同氏の口は暫く塞がらなかつた位だ、併し今更戻されもせず愚痴たら／＼受取つたが、それを誰れの惡戯か翌朝になると廿枚の即功紙が奇麗にずらりと並べてあつたのを見ると、誰れでも吹き出さずには居られなかつた。次は又平君で一行からサイクリストの稱號を贈られた、只其名稱から推すと頗る意氣に聞へるが打明けた處、當人は聞くたびに何時も氣が塞ぐと云つた。併し旅行中君の氣取り方と云つたら、中々こつた者で、先づ脛は紺の脚半を穿ち半ずぼんの様に見せ、紺足袋草履穿きでゴム靴の様に見せ、手拭を腰にはさんでハンカチーフの様に見せ寫生板をかゝへて洋冊の様に見せゼボンの釦をシャツに付けて銀の釦に見せた處の影法師を障子へでも寫したら、宛で當時流行のサイクリストの形であると云つた者がある。又一行の孰れも異形なるが中に、特に异彩を發揮したのは、武士君であつた、白シャツに棒じまの袴を着、茶の小倉袴を裾短く穿いて天氣の日にも、番傘を腰から離した事がない、

一鉢、君の風采の粗野磊落なる様が、如何にも佐賀縣士族〔該当者は腹巻勝太郎〕で、元神奈川縣警察署詰巡查で、明治十年田原坂に戦功が有つたが、此頃妻が病氣で今日歸國の鉢だと、一般の評で有つた、可愛さうに、當人が聞いたら、さぞ口惜く思ふで有らう。此外日天、月天、若草山、百姓、班白の巡查スタイルなど、一人で四つも五つもの異名が有つて、數へ立てた時は限らない事だ、(同行の一人〔四年生])

○彫刻科 各科の同本事はいと／＼面白く拜讀致し居候が、さて我等のクラスは、別段之と思はしき事も無之、又當科と申しても木彫、石彫、牙彫等いくつも有之候に付、詳報は餘り永々敷候故一通の案内を申上可く候、下駄のまゝ昇校を禁ずと申候支關を御入り候ひて、會計課の後ろが研究科の塑造教室に候が、入口の授業時間中云々の札と、掃除受持小使小林友吉の懸札御覽下され度候、さて教室の直ぐ右手に、泥造の立像一鉢御認め爲さる可く、こは東大寺戒壇院四天王の一、廣目天の御像にて加納鐵哉氏の模造に候、所謂天平時代の最も宜き標本に候へば、篤と御覽被下度候、尙木彫にて等身大の肥滿せる羽織袴の紳士の立像は、故日本銀行總裁川田小一郎氏の肖像にて、故山田鬼齋先生の遺作に候、入口と反對の扉をお開きなされ候へば、次は四年の塑造教室に候、入口の懸札は前と同じく候、此室の入口正面の所に大鏡、据付け有之候故、まだ向ふにも教室有之ものと考へ鏡と鉢合せ致さぬ様御注意申上候、こゝに洋服にて讀書せる等身大の木彫像は種痘術發明家なるゼンナ氏にて、高村光雲先生の監督にて、先生の高弟米原雲海氏の製作に候、又浮彫にて等身大立像大額は、石川光明先生の製作にて、故山田〔顕義〕司

法大臣の肖像に候、こは大審院前なる紀念碑の原型に候、此所にて一寸申上候が前の諸像は皆學校にて鑄出せし原型に候、次は木彫科全科の教室に候、先づ戸棚の内に斧、鋸、鉋、曲金、など飾付け有之候故御覽下され度、從來此の室は疊敷に候も、本學年より椅子机と改まりたる者にて云はゞ日本彫刻の高襟式とも申す可く候、餘事はさて置き、入口正面の右手に聖觀音（臺共八尺）又右手に極彩色の技藝天女（一丈二尺）中央に金色の維摩の大額など、皆こゝの参考品にて、この技藝天女は、竹内「久一」先生の御製作にて、先生が永らく奈良にて研究せられたる、其結果の製作に候へば、其姿勢態度に於て、古來の風格を脱して、新らしき形の與へられ候へば、御留意有之度、此像に付き、面白き逸話の有之候が、曾てシカゴ博覽會出品の折、米人は早合點にも蠟にて製作候と考しを、説明の末然らばとて目立たぬ後の方を少しく刀にて削り、材料の木材なるを明し候處、彼等は其木彫なるを始めて知り、頗る驚嘆致し候由に御座候、御案内申度事も澤山候も、最早十二時の號鐘も鳴り申候へば、食堂にてゆる／＼申上可く候。（彫刻科）「文中の広目天模像、川田小一郎銅像原型、ゼンナ銅像原型、伎芸天像は本學年美術資料館所藏。山田顯義肖像浮彫大額（山田伯記念銅標木型）は明治四十四年焼失。」

東京美術學校近事（二一五。M・三五・十二・五）

○前號掲載後に於ける職員の動靜左の如し。

十月二十六日、助教授櫻岡三四郎氏は、八月下旬より、宮城縣仙

臺市に設置する昭忠標建設工事に付、出張し居られしが、此日歸京せられたり。

同月二十八日、教授竹内久一氏は、堺市公園中央に設置する噴水龍神塑像實地製作監督の爲、堺市へ出張せらる。

○合金法の増課 本月より囑託森「省吾」工學士の擔任にて、彫金鍛金鑄金の各科へ合金法を課し卒業生中の望の者にも聽講せしむることゝなせり。

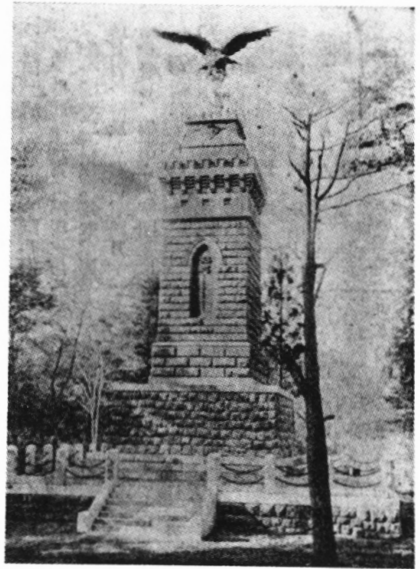
○博覽會の噴水器 第五回博覽會美術館前に建設する、觀音塑像の噴水工事は、十一月中旬其工事を完了し、堺市公園中央に設置する龍神塑造の噴水も、其工事を取急ぎ竣成せり 而して又堺市水族館に付設する、童子の噴水器は、既に原型の製作を竣り、目下津田助教授監督の下にありて、靱井菊次郎、鈴木一、香田麟橋、伊藤龍吉の諸氏、其鑄造を擔任し居れり。

○仙臺昭忠標落成 同標の建設に關しては、曾て記す所ありしが、愈十月下旬金鴉の引上げを竣り、悉皆落成したるを以て、十一月廿二日其落成式を舉行すといふ。

○縣賞圖按の受賞者 先頃來本校へ依頼し來りたる、縣賞圖按數種あり、其中既に審査を了りて、賞を受けたる諸氏左の如し

○青年界表紙圖案（金港堂依頼）

一等賞	金五圓	日本畫科三年	藤木正之助
二等賞	金三圓	同撰科一年	水島爾保布
同	同	<small>（子備の課程）</small> 豫備課（彫刻）	小倉右一郎
三等賞	金貳圓	西洋畫撰科一年	今關 胤雄



昭忠標

『東京美術学校校友会月報』第1巻  
第9号より転載。

同 同 圖案科二年 澤田誠一郎

○婦人界表紙圖案(同)

一等賞 金五圓 圖案科二年 十二町貞吉

二等賞 金參圓 同 澤田誠一郎

同 同 同 同

三等賞 金貳圓 日本畫科三年 渡邊忠三郎

同 同 圖案科一年 松川第八郎

○動植物繪端書圖案(大阪南光堂依頼)

一等賞 金貳拾圓 日本畫撰科二年 伊藤 豊吉

二等賞 金拾圓 西洋畫撰科三年 橋本 邦助

同 同 日本畫科二年 谷口善四郎

本圖案は一組十枚つゝなり。

○歴史畫繪端書圖案(同上)

二等賞 金拾圓 圖案科二年 澤田誠一郎

本圖案も一組十枚。一等なし。

○青年界附録新年繪端書圖案(金港堂依頼)

一等賞 金五圓 圖案科二年 澤田誠一郎

二等賞 金參圓 豫備課(彫金)  
[子備の課程 以下同] 山川 茂雄

三等賞 金壹圓 豫備課(圖案) 佐藤 勉

同 同 同 (日本畫) 鹽崎 一郎

西洋畫撰科三年 森岡 柳藏

本圖案は二枚一組なり、以下文藝界、婦人界の分も同じ。

○文藝界附録新年繪端書圖案(同上)

一等賞 金五圓 圖案科二年 澤田誠一郎

二等賞 金參圓 同 同 十二町貞吉

三等賞 金壹圓 西洋畫科一年 今關 胤雄

豫備課(彫刻) 小倉右一郎

○婦人界附録新年繪端書圖案(同上)

一等賞 金五圓 圖案科一年 松川第八郎

二等賞 金貳圓 西洋畫撰科三年 森岡 柳藏

豫備課(彫刻) 中村 武平

三等賞 金壹圓 日本畫撰科二年 石島文太郎

同 同 豫備課(圖案) 鹽崎 一郎

○大日本圖案協會受賞者 十月廿九日開きたる同會課題審査會にて、本校生徒豫備課(日本畫)鹽崎一郎氏は一等賞を、圖案科二年十二町貞吉氏は二等賞を得たりといふ。

○免許狀下付 特別の詮議を以て、無試験檢定にて、十月二十一日左の日本畫科卒業生諸氏へ、中學校師範學校高等女學校の、圖畫科

教員免許状を下付せられたり。

志賀静山（大阪府平民）金子泰（東京府士族）松原善人（長野縣士族）小林一意（群馬縣士族）丹羽五十吉（東京府士族）山脇雄吉（鳥取縣平民）山縣丹治（秋田縣士族）

### 教室雜俎〔同〕

○木炭畫教室 僕たちは今年入學したばかりで頓と勝手が知れない。はいつた當時は何れを向いても知らない者許りて、こわい顔を爲た人やら、頭を分けた高襟が目について、恰も異人ばかりの國へでも留學した思ひで有つたが、然し日數の經つにつれて、隣りに坐つて居る人の名前も知れ、顔の調子と濃淡の工合で、あれは何と云ふ人と知れだすと、だん／＼それに異名も出來て來る。そこで此室の憲法では無いが、各自の渾名を諸君に紹介しやうが、誰れがどんな命名を有して居るかは次號に申し上げやう。（同室CC生）

○油繪教室 前略御免、さて此度は私等の教室の概略を申上可く候が、當教室は御承知の場所にて、ここには、二三年皆一所に居り候故、外面より見受け候時は随分混雜致し、不和など多き様考へられ候も、實際はそれと正反對に候。先生は私等を吾子の様に一々の面倒も面倒と思召されず親切になし被下候故我等も自然と父母の様に感じ申し、又上級の人は下級の者を弟の如く、知らぬ所など丁寧に注意いたしけれ候故、親身の兄弟も及ばぬ程睦まじく、相敬ひ相愛し其間少しの隔なく、誠に結構なる一家庭を形造り居候。其外、風のま／＼聞ゆる音楽の大弦は嘈々村雨の如く、小絃は切々私語に似たる、其優美なる、其愉快なる、我等の筆には盡され不申候。又

此外月に一回の茶話會を催し、互の意志を陳べ、又先生及上級生の實地研究談、學術講話等、誠に有益なる會も御座候、此會には會長幹事など、面倒臭きものは更に無之、誠の共和組織に御座候。又我室には運動部撰手の御揃にて、柔道には和田〔三造〕君、丸野〔豊〕君、薄〔拙太郎〕君などの豪のもの。弓術部には、跡見〔泰〕君、關屋〔敬次〕君などの百發百中の御方、殊に關屋君などは、十一月の小會に一等賞を得られしとかや。擊劍部には丸野〔豊〕君、熊谷〔守一〕君、高木〔巖または誠一〕君などを控へ。球戯部に於ては、學校の撰手御揃とも云ふ可きものにて、先づ脇坂〔安之〕君を始めとして西〔三雄〕君、橋口〔清〕君、岡〔四郎または修造〕君、薄〔拙太郎〕君、高木〔巖または誠一〕君など、次には辻〔永柳〔敬助〕、齋藤〔豊作〕、岸畑〔久吉〕、森田〔恒友または亀之輔〕、江南〔武雄〕、眞島〔中太郎〕君など、學校の球術部の一方は優に引受け申候て、敗れは取りぬ位に御座候。此外にも御座候へどあまり意張り過ぎても、宜しかるまじと存候故是れ位にて止め置き申す可く候（自慢生）

○日本畫科一年 拜啓窓外の山茶花も、稍久しう相成候處、教室にはストーブを開始致され、我等は日々樂しき團樂を喜び居候。それにつけても想ひ出され候は町田〔五一〕君にて候。随分寒むがりの癖に候へば、いつも／＼ストーブをいぢくり廻しては火を消され、まことにいま／＼しい人と寒さに凍へつゝ、打眩きしも度々にて候ひしに、今は故人となられ候へば、なか／＼にあはれ立まさりて、折々の噂をも致居候。いと罪なき様にて四條風の健筆を振はれ候を、實に惜しき事にて候。壁隅には今も尙彼人の絶筆なる、五位驚

の圖貼りつけられ、暮れ行く秋のあはれなる思ひ出ても多き事に候。本級は本科生僅に七名に有之候へ共、本學年よりは撰科講習科の方にも加はられ候へば、いと賑やかに心強く相成候。近來はお互に自然に接觸するの方針をとりて眞面目なる研究を致し居候。去十一月の初め三浦半島附近へ二泊にて校外寫生の擧有之候處、折柄の雨にて心強き方々のみ出掛られ候。其翌日も生憎の雨にて随分閉口致され候事と思ひの外、きびしき元氣にて、夥多の水彩寫生畫を齎らしかへられ候。承れば鎌倉にて踏み止まれ、夜な／＼なか／＼の賑ひにて、日頃おとなしき方々も一世一代の藝をつとめられ候。先づ水上「泰生」君の筑前琵琶、勝田「良雄・蕉琴」君の謠、相馬「正巳」君の追分など、いとめづらしく、大村「友雄」君の詩吟、さては稻本「徳之助」君が大蛇の手品大當にて候ひし由。先は右迄他には別段變りし節も無之候。(一年西村「喜三郎・青婦」)

○同科四年 當科の中で疊敷の名残を止めて居るのは此所だけで、想へば此教室と吾々とは深い歴史を有して居る。其始め入學試験の實技もこゝで受けて、豫備一ケ年も此處で送つたのである。其頃にはどこも疊敷で、今の三年二年あたりの教室は、眞中が一段低く、西洋の何かの雑誌の挿畫は、多分夫等の様で有らう。又教室は、いつも故山名先生が居られたので、今に先生が居られる様な心持がされる。誠に豫備を終つて此處を出てから、既に四年を経過したとは夢の様としか思はれぬで、人世の空過もこゝに至つては其極であらう、卒業製作なども、其頃未だ遠い／＼將來の事と自分は考へて居つたが、早本學年中に下圖を作れとは、僕に取つては非常の嚴命である。然し過ぎ去つた四年の日月の中に、吾人は或種の想を養はぬ

ではない、夜深く孤燈人定まりし折などは、修業の名残として、此處に止む可き製作の事を考へ出すと、又鼓動の高まつて眠られぬ事などもある。同窓の内大方は考へも極まつた様だが、誰れも熟考に熟考を重ねて居るのかして、發表した者が無いが、自分は今生同窓が考へて居る事を迎想して、製作のあて推諒を試みやう、先づ中島「重丸」君は常に平和に圓滿な事を心懸けて居られる様で、色彩なども單純な種類で現すよりも寧ろ全相を以てすると云ふ方に重きを置いて居るのを見ると、山水繪も特意であるが、製作には花鳥の方を撰むかと思はれる。又葛「揆一郎」君は専ら人物寫生主義で、啻に形相の寫生のみでなく、表情を描く事と色彩の自然色に近似させると云ふ事に務めて居る、又畫題も世俗の複雑した情狀を寫す事に重きを置いて居るから、以前にない方面を解釋される事と思ふ。笹島「秀弥」君は壯大の趣か、或は深遠崇高の美を現す事に務めて、想も豊富で宗教上の信仰と、非常に堅い自念心を持つて居るから、常に理想して居る力を宗教上の畫趣に求めて描き出す様だが、これを表はす描法や色彩に付て、以前より中々苦心して居る様だ。久野「亀之助・汪川」君は人間美の中で、最も勇威とかあるひは悲壯などの人の本性の強く働いた場合を寫すに務めて居るらしいが、未だ畫題に付いては聞かなかつた。澤津「昌利・松溪」君は今様美人とかで、田中「和一・春岱」君は、戰頭功成つて、將卒譽を負ひて歸國するを、幾多の市民が郷門に迎ふる所の由で、時代は天正頃とかと聞いた。長谷川「緑邦・等仲」君と井芹「市次・蘇泉」君とは西行とか云ふ様で、共に悲壯の方面らしい、此悲壯の美に付ては、伊藤「繁延・龍涯」君は以前からして心懸けて居るらしく、所

々の出品畫なども多く此方面を撰ばれるからして、多分今回も此の種で有るか、或る一種の人間美を自分の満足する迄續けると云ふ研究法も、一得ある事と考へられる。何にしても永久脩業時代の形見を残して置く事と有るから、輕卒に發表せぬのは然る可きである。

然し製作を終つた晨は複雑な社會の中に巻き込まれて、再び此處に親和な一團を形成する事が出来ぬと思ふと、残り惜い心地の感ぜられる。又吾等の卒業の間に下村〔觀山〕先生の留學せらるゝ事は、吾等の一身の上のみに付て言へば此上もない不幸で別れの悲みと云ふことは盡きない者で、それ以外にもせめては今一ケ年もと思はれるが、然し先生の壯舉として、我美術界の爲に、非常に賀す可きである。だけれ共愚なる小子も先生の教導の爲に、此繪畫の上に始めて光明を望む事が出来て、今數年懇篤なる教訓に浴したいと思つたのに、今は遠からずして其事も出来なく成ると思ふと、吾人は實に杖を失つた盲者の感がある。然し區々の私情を以て先生を煩す事の吾人の罪の大なる事は常に恐れて居る。(四年江村〔永倉茂〕)

東京美術學校近事〔一一六。M・三五・十二・二五〕

○前號掲載後に於ける職員の動靜左の如し。

十一月十八日、教授大村西崖氏は、第五回内國勸業博覽會事務官仰付けらる。

同月二十一日、學校長正木直彦氏は、宮城縣仙臺市へ出張せられたり。

同月二十二日、博覽會美術館前、觀音塑造噴水器の實地製作のた

め、去九月中旬より大坂市へ出張したる、黒岩〔倉吉〕助教授の一行は、其工事落成を告げたるを以て歸京す。

同月二十三日、堺市公園に建設の龍神塑造噴水器据付のため、同市に出張したる、竹内〔久一〕教授の一行歸京す。

十二月四日、柔道指南足厚實氏、願に依り囑託を解かる。

○懸賞圖案の受賞者 本校生徒中より募集したる懸賞圖案に就きては、前號にも記載する所ありしが、其後依頼によりて募集し、審査の上優等と認められ、賞を受けたる諸氏は左の如し。

○都の花表紙圖案(都新聞社依頼)

壹等 金六圓 西洋畫科三年 谷 齊一

貳等 金四圓 圖案科二年 澤田誠一郎

同 金四圓 日本畫撰科二年 石島文太郎

參等 金貳圓 字備の課程以下同 豫備課(彫金) 山川 茂雄

同 金貳圓 圖案科二年 十二町貞吉

同 金貳圓 日本畫撰科二年 古賀源四郎

○東京美術學校校友會賞牌圖案

壹等 謝義金貳圓 豫備課(圖案) 佐藤 勉

貳等 謝義金壹圓 圖案科二年 十二町貞吉

○圖畫教員免許狀の下付 特別の詮義を以て圖案科卒業の静岡縣平民川上爲之助氏へ、文部省より無試験檢定にて、圖畫教員免許狀を下付せられたり。

○弔詞等の贈呈 元本校の商議員たりし、故佐野伯爵〔常民。十二月七日歿〕は、本校創立の時より數年間、本校の爲に盡す所ありしのみならず、我邦の美術上には殊に關係も深かりし故を以て、本校



及職員一同より、弔詞並に生花貳對を贈呈し、其の葬儀日には、各科主任教授は各其科を代表して會葬せり。

○下村〔晴三郎〕櫻岡〔三四郎〕兩氏の送別會 來年一月、兩氏とも外國留學の途に上らるゝを以て、十二月十八日、本校職員一同は兩氏を招待し、校内に於て送別の宴を開かる。

○本校生徒の受賞 先頃開きし美術協會の第三十二回展覽會受賞者左の如し。

銅 牌 襖圖案 圖案科二年	十二町貞吉
同 同 同	澤田誠一郎
襖狀一等 彫金觀音額 彫金撰科三年	富山 休三
同 二等 襖圖案 圖案科一年	松川第八郎
同 三等 同 同 一年	森垣 榮

#### 教室雜俎〔同〕

○漆工科 わが科の事を紹介するのは、今度が初めてですが、何やら目ない様な次第で、ドウモ、實は早くから出したい又出さねばならないと思つて居たのですが、記事幅湊とやら聞いたから、ソウ急ぐには及ばないと遠慮して居たのです。處で一つ美しいところをお話しますが、是迄他の科で、色々此雜俎中に愉快なことやら、お自慢の話しやら、澤山出ましたので、何やら口眞似の様ですが、一寸私の方は風變りです。一鉢我クラススは、兎角遠慮勝のもの計りで飛び跳ねる様な者が無いのは妙です。又有ても感化されるのかも知れぬが、何にしても實技の精緻なる事と、材料の取扱に靜肅を要する事とが、大なる原因でしやう。だから運動の方は皆無で、此間の運

動會にも、メダルが一つしか落ちなかつたのでも分る。其代り餘興に松楓亭として抹茶席を設け、來賓及び教員生徒を歡待した事は、最も其全鉢の性質を現はし得て盡せりと思ふのです。又何れの科も同じ事でしょうが、我クラススは人の少ない丈けそれ丈け、よく圓滿に行つて上下の差別なく、一つの火鉢の周りで、愉快に話して居るなどは、何とも云へない美しい有様です。且つ又生徒の間には繪畫圖按研究會を設けて、毎月お互の家に集り親睦と研究とを謀り、或は隔月斯道の大家の工場を巡覽して見學を致し、大に社會的智識を養成する法をも講じ、また或場合には、先生も一所になつて、茶話會等を催して、情交を温めて居るなどは、随分自慢しても宜い程ゆかしい。卒業生と在校生との間も頗る親和で、卒業生が地方へ赴任の際などには、送別會として必ず参考書類を贈ると云ふ習はしになり卒業生も屢々音信を以て、地方の狀況を報じ、或は上京の節は必ず來て、種々經驗談をすると云ふ風で、實にうるはしいクラススです。これまで此様な立派な事が工藝科の二階のみに隠れて居たのは、甚だ遺憾で丁度谷間の姫百合でした、先づは是れで（NO生〔一年生岡本尙一カ〕）

○油繪教室 一寸諸君に紹介致すが、我が木炭畫、油畫兩教室に跨つて、此に入谷五人男と稱せられてるものがある、毎日毎日一升五合：二升も這入りそうな大井鉢に、午飯をしこたま詰め込んで、それをさも輕さうに手に提げ、お揃でぞろぞろと、學校へ押し寄せ來ては研究に餘念ない。午時の鐘を打つと、食堂へ詰め掛けて、小さな湯飲茶碗で、何杯となく：多分鱈腹：食ひ込むといふ始末。その歸りがけには、必ず柔道か擊劍かさなくばテニスでもやつて行く。

してその歸り途筋は、博物館の前から其横手へ曲つて、兩大師の後ろの坂を下り、踏切を越へて、それから交番の所を右に折れ、突き當つて左へ曲り、大お得意の芋屋の前や豆屋の前、豆腐屋の前を過ぎつて、寿し屋の所を一寸右へ避けて、それから後は暫くの間眞直に、此度はまたお得意の菓子屋の一寸先から右折するのである。その立派な瓦斯の點いた衡門には、パレットが張り付けられて、格子戸には五人男各自の自畫像が、風に搖られて面白さうに遊んで居る。それからその生活の有様を観察するに、いかにも美術的であつて、常には眞地目に斯道の研究に一身を捧げて居るかはりに、時々大歌漫吟まるで小兒の様に無邪氣に愉快に、日を送つて居る。要するに、かの溫柔、豪毅、優美、高尚、快活、自重、謙遜、質朴、洒落、親實等は、皆是れ等五人男の共同生活の特質中に含まれて居る分子である。まづお隣りの妻君がお産をする、オイソレで直ぐ赤い反物が隣へ舞ひ込んで行く……まあ凡てがこうした様なものであつて、そのゆかしい名は、近隣に嘖々たるものである。誠にその生活の一般を窺ひたいと思ふ者があるならば、誰れでも遠慮は不用んから、先づ何かうまいものでも提へて、その門を訪ふて、快談に一日を、また御望みとならば、二日でも三日でも居續けて、その寫實演劇を拜見するのも宜からうし、またその改良舞踏に目を注ぐも宜からう。(油繪生)

○木炭教室 僕の級で豫備の人は、中々木炭畫に熱心である。近頃は又大に水彩畫が流行しだして、撰科一年生中には、水彩が頗る盛んで、大槻「式雄」、山本「鼎」、橋本「邦三」、荒木「芳男」、平井「武

雄」の諸君などは其の重なる者で、何しろ平井君は豫備の人だが、中々旨いもんだ、油繪も上級生にまけまいと、近頃木炭畫教室は油の箱でうづまつている、火金の兩日なぞは、黒田「清輝」先生の叱正を乞ふ爲、教室の一隅に小展覽會が開かれる。中々盛んなものだ。金土の兩日に他科の諸君が來らるゝが、其の中の人で自分等が居候扱ひにされると云てるが、僕等のクラスでは決してそんな考へを持つて居る者は一人もないのだ(ＣＣ生「撰科一年白石祭治カ」)

○日本畫科一年 日の短きに、はや師走ともなりぬれば、何事も只手につかぬ心地致され候、顧みて九月以降、我等のなし來りし所を考へ候へば、互の上又研究の上にも、種々なる變遷は刻々限りなきものゝ如くに被覺候。とり分け目に立ち候は、校外寫生の盛に行はれ候事にて、一時の熱とも申さるゝ人あるかは存ぜねども、兎に角三秋の氣澄み亘る時節に跨り候事なれば、とても趣ある自然を見逃さじと勉めたる事と存候。聽て新なる冬の季候に入候へば、寫生も從來の如くはなるまじく、且や休暇にも際し候へば、更に何かの修養すべき要求も出づる事と存候。若し小生の要求なるものを打明け候へば、近く趣味の研究と、遠く運動の實行とに有之候。前者はやがてストーブ團樂の話題を快瀾に且樂しからしむべく、後者は遂に我級の活氣を旺ならしむべしと考へ候。先は右迄早々(にしき)

○同科二年 僕の級ほど變化に富んだ面白い組はあるまい、と申しただばかりでは分るまいが、表を見て裏を窺ひたいのが人の常情、御差合があつたら濟まないが、人さまの十人十色、違つたところのおかしさを、まゝよ怨まれるまでも書い付け見ん。

伊藤君號は綾春、本名は豊吉と申す、別段師匠の綾岡「有真・池田



有真」さんにアヤカルつもりでもあるまいが、花鳥が大のお手のもの、一日學校を休めば、大枚何圓といふ収入のあるといふお腕前は、たゞ／＼恐れ入るの外はなし、ゴールの眼鏡にチツクで分て、和服に着更へて雪駄を穿いて、取つて置ききの咳オホンと押出した時は、流石はお江戸の眞つたゞ中日本橋の粹様よと、人も免し御自分でも……………言はぬが花！。お次は古賀君玄洲といへば坊主臭いが源四郎といへば三番目狂言の色男役、人物畫はその最もお得意とするところ、お國は佐賀なれども技術がサがるといふ譯もあるまじく一寸した意氣なところに目を付けてるらしいが、もう少し眞面目に研究したことならとは大きな目をお世話、慾を申せば少し氣の早過ぎるが此人のゴガツた癖とは之も誰やらのへらず口。さてまた次の多田「雄三」君は千葉縣の出生、ミクランジエロ、芳崖、大觀などが其理想のものらしく、雄大とか崇高とかに目を注いで居るはいづれタゞならぬ人物、以前は……………オツと天機漏すべからずツ。水谷「四郎」君は近頃神波「泰造」君のお仕込にてか、駄洒落の進歩驚くばかり、併し敢て畫を發めに四郎といふ譯にはあらず、怒り給ふな水谷の君！。神波君の駄洒落ときてはいやはやそれこそ随分凄いもの、此人の前ではめつたに口はきかれず、無暗に洒落飛ばさるゝが故なり、隠し藝として端歌淨瑠璃は、さすがは上方仕込だけにたしかなもの、あのみ眞面目くさつた男がノ。此外金子「朔太郎・素水」君の音羽屋張りなる、木村「鉦吉・碧攸」君の無邪氣にして物眞似に巧みなる、中川「竜」君の多藝（？）なる等一々擧ぐるに遑あらず、若しそれ斯くいふ僕に至ては全く無能の藝無し猿！。（撰二の石島「文太郎・古城」）

○圖按科の方は、同科を以て學校内のスイートホームなりと云はれたが、僕達のクラスも又おさ／＼劣らない、頗る協同團結の力に富みて、甲唱ふれば乙丙皆和して相援くると云ふ有様である。萬事皆協同的にして、遊べば共に遊び、學べば共に學んで居る。運動會の時の如きは協同して萬事を行つた。

我がクラスは一躰に活潑で、若し惡しく云ふ人は亂暴と云ふかも知らぬが、他の如く溫柔で始終教場内で勉強計りして、他の事は何も知らない君子的人物のみでなく、ボート、運動會、武術等の躰育の事にも又熱心な連中が多い、それで他のクラスに比すれば、活潑の氣風に富んで居る。去年以來も度々ボートの練習に出かけた事が有るが、常に我々クラスと、圖按科の一部の人とのみにて、他級の人は見なかつた。大躰美術家と云へば、優美とか何とか云つて、畫の他の事は何も知らない、肉躰的病者にては到底二十世紀の美術家は云へない。今日の美術家たるものは、身躰壯健にして鬼神をもひしぎ得る底の壯夫にしてそれに伴ふ活潑有爲なる精神を備へざるべからず。而して活潑なる精神は、活潑なる身躰に宿るものであるから、藝術研究の側らには、又活潑なる身躰を養ふべく、勇壯なる運動をなして、社會をして今日の美術家なるものゝ眞價を知らしめんと云ふのが、我がクラス全躰の持論である。

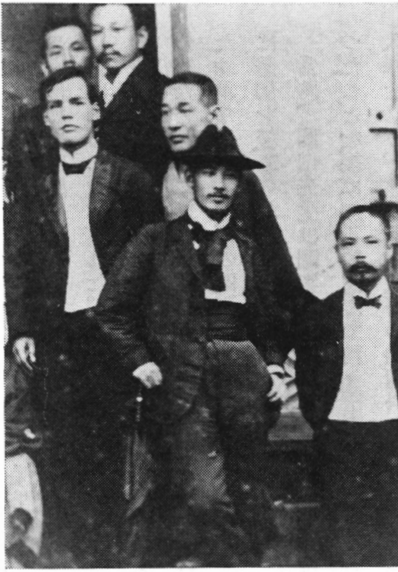
今一つ我がクラスの他と異りたる點は、前號端書便によりて氣がついたが、我が校の卒業生が、自己の思想を、自己の口にて發表する事が出来ないのは不便であるとは、我が白濱「徵」先生の御持論で、先生の發議によりて、同級中に講談會なるものを組織して、先生の監督の下に、既に第一回の講談會を開いたが、案外に好成績で

あつた。今月は運動會や何かで多忙であつたため、未だ催されないが、爾後は益々盛んに談論の練習をして、其の不自由のない様にするつもりである、此の二點は確かに他のクラスと異なる點である事を信ずる。猶其の他に御知らせ申すべき事は多いが、大切の紙面を塞ぐから餘は次號に譲る。(本二某生)

### 関連事項

#### ① 岡田三郎助帰国

明治三十五年一月二日(「東京美術学校旧職員履歴書」による)、岡田三郎助がフランス留学を了えて帰国した。岡田は黒田清輝、久米桂一郎と同様にラファエル・コランのもとで洋画研究を続け、その傍ら装飾術についても学び、ベルギー、南仏、イタリア、イギリス等を旅行したのち帰国したのであつた。滞欧作のうち「セーヌ河上流の景」、ホルバイン作「カンタベリー大司教ウイリアム・ウォーラ



帰国早々の岡田三郎助(中央)  
明治35年7月卒業記念写真より。

ム像」模写、レンブラント作「自画像」模写等が本校に収蔵された。

岡田は帰国の翌月に囑託教師として本校に復帰し、西洋画授業を週二日担当。翌三月五日から仮入学生の本炭画授業担当に転じ、同年十二月五日に教授に昇格して図案科の絵画授業を暫く担当する。

『美術新報』第一巻第五号(明治三十五年五月二十日)には岡田の談話「図案に就て」が掲載されているが、これによって彼が図案に対して並々ならぬ関心を寄せていたことと、図案の革新に関する考えの一端を窺うことができる。なお、帰国して間もない頃の岡田については、教え子たちが次のように述べている。

「上略」明治三十五年四月、私は東京美術学校の假入學と云ふのへ這入つた。當時本入學は七月であつたが、其れ迄の數ヶ月を、希望者には此假入學に於て日本畫、木炭畫、塑造の三種目に就いて初步的指導を受ける事が許された。此の時の木炭畫の先生は、文部省の海外留學生として佛蘭西滞在から歸朝せられたばかりの岡田先生が受持たれた。地方の中學を卒業した儘の私には岡田三郎助と云ふ名前は無論初めて知るので、何んな繪を描く人かなど全く知る處は無かつた。恐らく西洋畫家で其迄に私が少しでも知つて居たのは黒田清輝と云ふ名前位のもので有つたであらうか。

岡田先生が初めて教室に來られた時、其の白哲美髯、態度明快、ギユウ／＼音がする様な羽織袴の風貌は、私が今迄懐いて居た「先生」形の概念から甚だ異つたもので、薄汚い教室の背景と